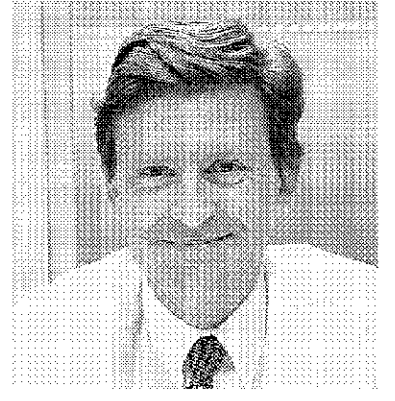


シンガポールはバイオ研究の中心を付加価値の高い新薬開発へとシフトさせている。その口火を切った経済開発庁などが五年前に設立した同国初の創薬ベンチャー、S-バイオのヤン・カールソン最高経営責任者（CEO）に現状を聞いた。

「大腸がんや乳がんなどの固形がんと、血液のがんの両方に効く抗がん剤候補の新規化合物の動物実験を進めている。すでにマウスやラット、イヌでがんが縮小する効果を確認しており、来年には初期の臨床試験（フェーズ1）を始められる見通しだ」

シンガポール バイオ最前線を聞く

▽下



S-バイオCEO
ヤン・カールソン氏

抗がん剤、来年にも治験

▼分子標的薬 主にがんの発症や悪化にかかわる特定の分子だけに作用する薬。がん細胞の中に入り込んで作用する「低分子」と呼ぶ小さな化合物と、がん細胞周囲にくっつく「抗体」と呼ぶたんばく質に大別される。従来の抗がん剤より副作用が少ないと期待されているが、低分子の肺がん治療薬「イレッサ」（一般名：ゲフィチニブ）では予想外の副作用が多発したため、詳細な検証が必要となっている。

分子標的薬

「この新規化合物は低分子と呼ばれる分子量の小さい物質だ。がん細胞が周囲から質。がん細胞の中で染色体を制御している酵素『HDAC』にくっつき、込んで増殖にブレーキをかける」

は旧藤沢薬品工業（現アステラス製薬）が開発した別の候補薬が既に臨床試験入りするなど国際的にも競争が激しい。「HDACはがん細胞の種類などによって様々な個性がある。現在では約十八グループに分類さ

に就いた。シンガポールは環境はそれほど魅力的か。「小回りが利くベンチャーで仕事をしたかった。研究テーマを絞って人材などを集中投資すれば巨大製薬企業にも十分対抗できる。国内のトップ研究者のレベルは高く、例えば国立ゲノム研究所と共同で抗がん剤の新たな標的を探索中。カイルンとともに出資元となっている経済開発庁傘下のベンチャーキャピタルの後押しも大きい」

「研究スタッフは五十人、十二カ国にわたっている。情報収集でも重要な役割を果たしてくれており、そうしたパイプを生かした。この連載は川俊成が担当した。」